

「京都市内小中学校における多様な児童・生徒に対する学習支援と
学生によるフィリピン政府に対する事業結果のフィードバック参加報告書」

京都大学文学部3年 立元圭

今回のフィリピン研修は約1週間という短い期間ではあったが、様々な期間、施設へ赴き、たくさんの体験をすることが出来た。具体的には CFO での意見交換、日本に出国せんとするフィリピン在住の方々へのプレゼンや、ソーシャルワーカーを通してのインフォーマルセクターへの訪問、アジア開発銀行の訪問など、密度の濃い時間を過ごすことが出来た。フィリピン大学での学生との交流や、観光等も含めて、毎日が非常に充実していた。CFO に関しては、最終的に研修修了証のようなものをいただき、一定の達成感を得ることが出来た。

● 研修を通して思ったこと

・ CFO での経験

CFO でのプレゼンや、職員、申請者とのコミュニケーションは暗中模索ではあったが、最後になるにつれて方向性も定まり、これからにつながる関係構築が出来たのではないかと考える。

個人的な振り返りではあるが、自分自身プレゼンの準備や、CFO や国際結婚、移民問題などについての事前勉強がまだまだ足りていなかったと痛感した。初回のプレゼンが最たる例である。しかしながら、OJT という強みを認識し、回数を重ねるに連れて、プレゼンの内容も選択と集中を繰り返し、改善させることが出来た。これから日本に行かんとする人々に対して、微力ではあるが力になれたのかもしれないという思いと、少しずつ改善を見せる自身のプレゼンにより、達成感を得ることが出来た。

フィリピン人の話に戻ると、この経験で一番記憶に残っていることは、実際にフィリピンの方々と話した時に、日本のことを良く知らないまま渡航しようと考えている人が少なくない、ということに驚いたということである。この件に関してどこが諸悪の根源なのかは定かではないが、フィリピンにいながらも、日本のことを、それこそ自身がそうであったように OJT で知ることができるような動きがもっと必要なのではないかと実際に現地に行かせてもらったことから、思った。

・ インフォーマルセクターでの経験

～ソーシャルワーカーとの関わりを通して～

二つ目は、インフォーマルセクターでの経験である。ここでは特にソーシャルワーカーとの関わり合いの中から感じたことを記述する。

2 日目の午後に、訪問した NGO にてソーシャルワーカーと話をする機会があり、そこでの話で、フィリピンではソーシャルワーカーになりたいと思う人が少ない、という話を聞いた。その答えが予想に反していた為、驚きが大きかった。私が見てきたソーシャルワーカーのやっていることは、NGO 等の機関にて、インフォーマルセクターとの関係性を構築し、そのようなコミュニティに住む人々の生活を良くしていこうとする仕事であると認識している。フィリピンはストリートチルドレンに代表される、人間として心身ともに健康に過ごす為に、あってしかるべきのようなものを有せずして一日一日生きる人々が数多く存在している。であるからして、ソーシャルワーカーのような職業を選択する人々がもっと増え、そのような人々をうまく支援出来るようなシステムを作ることが、国が抱える大きな問題の解決の糸口になるのであろうが、現実には逆であると聞いて、衝撃を受けたのである。このことは日本においても言える例であり、例えば介護老人施設にて日本人ではなく外国人の職員を雇うといったことも同様の例であると言える。

この現状をどのように受け取るかは未だ消化出来ていないことであるため、これからの課題としたい。しかしながら、フィリピンの現状を自身の五感をもって体験したことにより、考えの幅を大きく広げることが出来た。ひいては、日本の問題もフィリピンのそれと、根幹を同じくするのではと考え、客観的な視点から日本を見ることが出来た貴重な経験であった。

● これからにむけて

今回のフィリピン研修を、一回だけのものにしない為にも、今回で得た様々なきっかけを大切にしながら次につなげていければと考えている。具体的には、終盤に新たに開設した Facebook でのコミュニティページでの定期的な情報発信や、日野小学校での学校ボランティア、今回の研修の深い振り返りなど、次回の研修までにやるべきことをしっかり定め、入念な準備をすることで、今回の経験や関係性が改めて活かされるのではないかと強く思っている。